

印旛村立図書館の過去・現在・未来

佐瀬 一雄

公民館図書室時代

公民館図書室では、蔵書数約20,000冊、ブラウン方式の貸出サービスをしていました。図書管理システムが導入されていなかったため蔵書目録を作成し、蔵書を管理していました。しかし、この目録も全資料が記されていた訳ではなかったため、場合によっては役に立ちませんでした。

県立中央図書館から相互貸借で約3ヶ月間、200冊の資料を借りて利用者に提供してもしました。このサービスのおかげで、予算が厳しく、新刊があまり購入できなくても、利用者から苦情が出ることもなく、円滑に資料の貸出ができました。しかし、このサービスにもメリット・デメリットがあり、借りる当村側は助かりますが、貸し出す県立側は、貸した資料が返らず、紛失に繋がってしまい、問題視する部分が大きくなり、平成15年度を以って廃止が決まり、当村としては貸し出せる資料の確保が難しい状況に陥り、リクエストを中心とした、県内相互協力ネットワークサービスに頼った資料提供へ移行していきました。利用状況は1日10人前後、貸出冊数にして1日70冊ほどでした。

事業としては、『ちびちびくらぶ』という絵本の読み聞かせと手遊び、わらべ歌を中心とした内容で、2～4歳児を対象にした教室で、毎月第2・4火曜日に実施していました。この教室は、絵本の読み聞かせや手遊び、わらべ歌に実績のあるグループを講師に招いて実施していました。教室の和やかで楽しい雰囲気や講師の皆さんの評価が口コミで広がり、とても人気がありました。

小学生対象のおはなし会も、夏休みと冬休みの年2回実施してきました。こちらの教室

は各小学校にチラシの配布を依頼し、また広報に掲載したりして対象児童を集い、実施しました。内容は絵本や物語の読み聞かせ、素話を中心とし、児童の集中力が途切れそうな時に簡単な手遊びを交えるものでした。読書や本に関心の高い児童が集まりました。

公民館図書室から図書館へ

平成7年10月に村内在住、20以上の方3,000人を無造作に抽出し、住民意識調査を実施したところ1,298人、43.3%の方から回答をいただきました。その結果、全体の約80%の方が図書館の設置を望んでいることが分かり、平成15年10月24日に開館した福祉活動を支援する拠点「ふれあいセンターいんば」の一階一角に図書館が併設されることになりました。

この施設は、

1. 誰もが参加できる健康増進プログラムの実践
 2. 保険・福祉に関する住民サービスの拠点
 3. ボランティア活動の拠点
 4. 地域住民の楽しい交流の場
- をコンセプトに設立されました。

「ふれあいセンターいんば」の名称は「ここに来れば友達に会える、話相手がいる、暇を見つけて出掛けてみよう、そんなふれあいができる施設でありたい」という気持ちを込めて名付けられました。その名称のとおり健康づくりを読書・情報・実践の面から支援し、充実した福祉サービスを提供する拠点として、地域住民に幅広く利用されています。

図書館もこの複合施設という利点を活かし、館内中央に「健康づくりコーナー」を設け、医療や薬学・栄養学や各分野より健康に関す

る資料を集め、充実させております。

赤ちゃんから高齢者まで、幅広い世代が気軽に立ち寄り、明るく温かい雰囲気を作り、知りたい資料や情報が何でも提供できるよう心掛けております。

図書館開館～現在まで

平成15年10月より、村内の小・中学校をはじめ、村民のカード事前登録を開始しました。小・中学校の事前登録を学校単位でとりまとめたのは、授業や調べ学習等で図書館を利用する児童や生徒が多いただろうと見込んだからです。広報で村民の事前登録を開始したことを知らせた時は、毎日多くの方が登録にいらしてくれました。職員や村民の期待が高まる中、平成16年1月15日に図書館は開館しました。

開館した当初は、村内唯一の読書施設ということもあり、連日多くの方（平日で約100人、週末に至っては最大で300人）が来館してくれました。予算も開館準備分とリクエスト対応分に分けていたので、村民のリクエストにもほぼ完全に対応できました。施設、資料、サービスの面で大半の利用者に満足していただけたと思います。

事業では、幼児、小学生を主な対象としたおはなし会や小学生を対象とした手作り絵本教室、高齢者を対象とした朗読会等を開催しました。おはなし会は、月1回ペースで職員や読み聞かせボランティアが読み手となり、絵本や大型絵本、紙芝居の読み聞かせ、手あそび等を組み合わせ、子ども達に少しでも本の世界の楽しさを分かってもらい、おはなしを通じて、関心の幅をひろげていただきたいと思います。手作り絵本教室では、皆さん独創性に優れた絵本を作られていました。絵本を作る過程で、本の大切さを学べたと思います。朗読会は、公民館と共同で開催しました。村に縁のある詩や短歌を朗読し、村民の心に何か届いたのではないかと思います。

図書館のこれから

開館5周年を迎え、状況は深刻になりつつあります。まず予算面ですが、かつて400万円以上あった書籍購入費は、40万円まで落ち、新聞・雑誌を購入する消耗品費も毎年10%カットされ、85万円あったのが現在では、47万3千円になり、行事等で講師を呼ぶ謝礼も10万円が0円となり、今後も予算の回復に至っては、明るい兆しが見えない状態です。

本来、図書館とは、利用者に必要とされている情報を広範囲から収集し、厳選して購入し、提供しなければいけない立場だと思いますが、予算がここまで圧迫されてしまうと、必要と思われる資料でも、需要が少なければ購入を見送り、ベストセラー等で騒がれ、需要が多ければ内容が薄く、一過性の資料と分かっているにもかかわらず、購入を検討しなければいけないと気づけば悪循環に陥ってたりします。

来館者・利用者の統計を見ても、予算と比例しており、今後どのようにPRして利用効率を伸ばしていくかが課題となりそうです。

(印旛村立図書館・館長)